

後撰和歌集注釈(五)

— 卷 三 春 下 (101 ~ 119) —

題しらず

伊勢

101 鶯に身をあひかへばちるまでもわが物にして花はみてまし

もし鶯に我身を変えることができのなら、せめて散るまでは自分の物にして、花は見るのだが。

二荒山本この歌なし。『伊勢集』は第四句「わが物なりと」(一二六二)。「あひかへば」は『新抄』に「我身と鶯とたがひに身をかへて」と解するが、「あひ」は虚辞とみて『抄』の「あひに心なし、鶯に我身をかへたらば也」でよい。「月かげに我身をかふるものならば」(古今集恋二六〇二忠岑)などと同想。

「散るまでも」は「木伝へばおのが羽風に散る花を誰におほせてこら鳴くらむ」(古今集春下一〇九素性)のごとく、鶯は花の散るまで梅の枝でなくものとされる。「我が物にして見る」との歌は、後代いく例が見られるが、初出はこの伊勢の歌のようである。

この歌の花は、前後の配列から言えば桜であろうが、鶯との関係では

工 藤 重 矩

(昭和六十三年九月二日 受理)

梅と考えるべきである。「散る花」ということでここに配列したのである。

『続後撰集』春上・一一〇・延喜御製「春風の吹かぬ世にだにあらませば心のどかに花は見てまし」

102 元良のみこ、兼茂朝臣のむすめにすみ侍けるを、法皇のめしてかの院にさぶらひければ、えあふことも侍らざりければ、あくる年の春、さくらのえだにさして、かのみさうしにさしをかせ侍ける もとよしのみこ
花の色は昔ながらに見し人の心のみこそうつるひにけれ

元良親王が兼茂朝臣の娘に住み通っていましたが、宇多法皇が召してその娘は法皇の院に仕えましたので、逢うこともできませんでしたので、翌年の春に、桜の枝に手紙を付けて、その女の御曹司に置かせましたうた

花の色は昔のままでうつろうこともないのに、その花を一緒に見た人の心だけがうつろってしまったことだ。

『元良親王御集』にはなし。元良親王と兼茂女との贈答は巻十四にも見え、その詞書には、みそかにすみ侍けるとある。

兼茂女は『尊卑分脈』に「兼茂一女子号兵衛 後撰集作者」とある。兵衛と呼ばれる女性は今集作者にもいるが、それは高経女で別人。また『大和物語』五六段に「兵衛の君」のもとに兼盛が通っていた話があり、一七〇段には「兵衛の命婦」が伊衡を見舞った話がある。一四七段にはその兵衛命婦が七条后温子の許で詠歌した話もある。この兵衛の命婦と兼盛が通った兵衛の君とは別人のようである。兼茂女兵衛がこの二人と同人か別人かは判然としない。

兼茂（九二三年没）の生年は未詳。弟の兼輔が八十七年の生れだから、八七〇〜八七五年頃の生れであろうか。元良親王は八九〇年の生れ、九四三年薨であるから、兼茂女の方が元良親王よりは十歳程は若いであろう。宇多法皇は九三一年に崩ずるから、仮に、兼茂女の生れを九〇〇年頃とすれば、この話は延喜二〇〜三〇年（九二〇〜九三〇）の頃のことか。

花は昔のままという発想、貫之の「人はいさ心も知らず古里は花ぞ昔の香ににほひける」（古今集春上四二）を始め多い。心が移ろふも、小町の「色見えでうつろふ物は世の中の人々の心の花にぞありける」（古今集恋五 七九七）など、花ⅡうつろふⅡ心という関係も多い類型。歌意は、当然うつろう（変色・散る）はずの花の色は昔のままで、皮肉にもうつろうとは思っていなかった人の心だけが移ろって（心変り）しまったというのである。「けり」は例の気付きの用法。

「見し人」は共に桜を見た人の意だが、逢うの意の「みる」を添えて

いる。本集恋四・八四三の「待たざりし秋は来ぬれどみし人の心はよそになりゆくかな」など。『中務集』Ⅱ二〇五に「京極院の桜おもしろきことを、夕暮にむ□のきんだちとめで見るに、蛇のはひのぼりければ、ことさめて、むかしめでけん人にやなど 花の色は昔ながらに見し人のかたちはことになりけるかな」とあるのは元良親王に拠るであろう。さて、この歌の状況設定は『伊勢物語』四段と似たところがある。色好みの男がある女の許に通っていたが、その女が召されて去った。その翌年の春の詠。おそらく、詞書を書く段階では『伊勢物語』を意識していたのではなからうか。

さてまた、元良親王ははなはだ色好みの親王で、百人一首に採られて有名な「わびぬれば今はた同じ」の歌は、宇多法皇の御息所である京極御息所襲子に忍び通ってその仲が世に知られてしまった時の詠である。兼茂女が元良親王の愛人でありながら法皇に召されたのとは、ちょうど逆の関係である。どちらの事件が先なのか不明だが、双方それを意識するところがあつただろうか。

月のおもしろかりける夜、はなを見て 源さねあきら
103 あたら夜の月と花とをおなじくはあはれしれ覽人に見せばや

月がきれいであつた夜、花を見て詠んだうた
この惜しむべき夜の月と花とを、同じ見せるなら、物のあはれを知っているような人に見せたいものだ。

『信明集』歌仙家集本（Ⅰ九九）には「いきたるにあはねば あたら夜の—— 返し 君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」とある。返歌は『古今集』春上の友則の歌である。『中務集』Ⅱ二

七九に「月あかく花面白夜、女」の詞書で収められている。中務と信明とは恋愛関係もあったので、相手に詠み送ったものなら作者が取り違えられることもありようから、中務の作という可能性もあるが、一応は本集に従っておいで不都合はない。

「あたら夜」は『万葉集』一六九三から見られる。『名義抄』に「惜ヲシム アタラシ アタラシガル、可惜アタラ」とある。

「月と花」の花は桜であろう。詞書・中院本・堀河本・二荒山本・片仮名本・承保本などは「さくらの花」とする。但し、後世この歌が本歌取りされる時には、梅の花として詠まれることもある。『玉葉集』春上一二六 定家「知る知らず分きては待たず梅の花にはふ春へのあたらよの月」など。

本歌取りは他に『玉葉集』春上・一一二・家隆「あたら夜のあはれを知るや呼子鳥月と花との有明の空」 『続拾遺集』春上・七二 後鳥羽院「あはれ知る人はとひこで山里の花に傾くあたら夜の月」 下句を心に取ったものとしては『拾遺集』恋三・八三一・元輔「思ひしる人に見せばやよもすがら我とこなつにおきるたる露」 『千五百番歌合』七三六 女房「同じくはあはれ知れらむ人もがな鹿と虫との秋の夕暮」など、なお多い。

『標注』に指摘するごとく、同じ信明に「色も香も我待つ宿の梅をこそ心しれらん人は見に來め」という類想の歌がある(家集一九)。

また、明石巻に、明石入道がただ「あたら夜の」と源氏に言い送るところは、『正義』『標注』に指摘があるが、この引き方でわかるとおり、信明のこの歌は、來訪をうながす歌である。「月夜よし夜よしと人に告げやらば來てふに似たり待たずしもあらず」(古今集恋四不知)の心。

あがたのゐど、いふ家より藤原治方につかはしける

橘のきむひらの女

104 宮て人きてもおらなんかはづなくあがたのゐどの山吹の花

縣の井戸という家から、藤原治方に遣したうた

都人は來て折り取つてほしい、蛙の鳴いている縣の井戸の山吹の花を。

「あがたのゐどといふ家」は『拾芥抄』に「井戸殿又縣井戸一条北東洞院西角」とある家。『大和物語』一一一段にも、大膳の大夫きんひらの娘どもあがたの井戸といふ所にすみけりとある。長女は少將の御という名で后宮穩子に仕え、三女には源信明がまだ若男であつた頃に通つていたという。治方へ歌を送つた娘がどの娘であつたかは不明。

藤原治方は『尊卑分脈』によれば、從五位上武藏守経邦の男で、少納言、大藏大輔、摂津權守、遠江守、上総介などを歴任し、正五位下に至つた。延喜二十年正月六位藏人から遠江守に任ぜられ(藏人補任)、二月には赴任の餞宴を藏人頭兼輔が催せうとしたことが『兼輔集』に、元藏人同僚藤原俊蔭も餞宴を催したことが『躬恒集』に見える。六位藏人になつた年齢をほぼ三〇歳前後とすれば、生年は八八五年頃、即ち元慶(八七七―八八五)の末から仁和(八八五―八八九)の頃であろう。

「都人」について『新抄』は「都人とは治方朝臣をさして言へるは論なし。しか都人としも言へるは、我が居る所を縣の井戸といふ、其のあがたは、古今集雜下小町の詞書に、文屋康秀が三河の掾になりて、あがた見にはえ出でた、じやと言ひやれりける返事といひ、伊勢物語四十四段に、昔あがたへ行く人に馬のはなむけせんととあるなどは、縣のものと意よりうつて、田舎といふが如くなれば、此所のも今我が居る所の

名のあがたといふ^{田舎と}いふ意につきて、さきの人を都人とはいへるなるべし」といふとおり、あがたのゐるの「あがた」の対語として「都」と言ったのである。『聞書註』は縣井戸が一条より北にあるので、都の外だからあがたと言ったと説くが、地理的にそこまで厳密に考えなくても、言葉のあやとして理解すればよいであろう。

「きてもを^おらん」は、来て居ると折るとの掛詞。七七番に既出。また同じ公平女の「諸共に井手の里こそ恋しけれ一人をりうき山吹の花」なども同じ掛け方。

「かはづ」と「山吹」の取合せは『万葉集』一四三五の厚見王「かはづ鳴く神無備川に影見えて今や咲くらむ山吹の花」に始まり、『古今集』春下・一二五・不知「かはづなく井手の山吹散りにけり花の盛りにあはましものを」に拠って、蛙・井手・山吹の組合せが一つの類型となった。「かはづ」は『万葉集』に二〇例ほど有るが、蛙ともカジカともされている。『古今六帖』三のかはづの項には、「秋風にかはづ妻よぶ」などの歌もあるので、蛙とも決められないが、「小山田の深田のかはづ」は稲田の蛙である。『万葉集』では「蝦」をカハツと訓むが、『倭名抄』に「蛙加閉流蝦蟇也」「蛙加閉流形小如蝦蟇而青色者也」とあるので、「蝦」が蛙の類を含むことは疑いない。「かはづ」は河鹿・蛙などの総称の歌語として用いられているのであろう。

この歌で「かはづ鳴く」と言ったのは、第五句の山吹との関連でもあるが、縣の井戸の井戸から水汲む井戸の連想で、山吹―井―蛙と縁を求めたのであろう。実際にかはづが鳴いていたのかもしれないが、鳴いていなくても、山吹に付けて贈った歌であるなら、観念の連想として、山吹―蛙なくは容易に受け入れられる表現である。

『温故抄』の指摘する、後鳥羽院の『かはづ鳴くあがたのゐどに春く

れて散りやしぬらん山吹の花」(続後撰集春下一五五)、『標注』に指摘する妙光寺内大臣家中納言の「山吹の花もてはやす人もなしあがたのゐどは都ならねば」(新葉集雜上一〇五六)は本歌取り。

すけのぶが母みまかりてのち、かの家に敦忠朝臣のまかりかよひけるに、さくらの花のちりけるおりにまかりて、木のもとに侍ければ、家の人のいひいだしける

よみ人しらす

105 今よりは風にまかせむ桜花ちるのものと君とまりけり

助信の母が亡くなりまして後、その家に夫であった敦忠朝臣が行き通っていましたが、桜の花が散っていた折に参りまして、木の下にいましたところ、家の人が詠んで出しましたうた
これからは桜の花は風の吹くのまかせよう。花が散る木の下にはあなたが立ちどまると知りましたので。

『敦忠集』I一三九・一四〇に「すけの君がはなくなりてのち、あのいへにいきて、さくらのちりし木のもとにたちたりしかば、いひいだす 今よりは—— かへし 風にしも—— ちるもうかりき」とある。

助信は敦忠の男。従四位下右中将に至った。母は参議源等の娘(尊卑分脈)。詞書の「家の人」は源等の家の人である。源等は天曆五年(九五二)の、敦忠は天慶六年(九四三)の卒去だから、この歌の贈答があったとき、父親の源等はまだ生存していた。助信の母の没年は未詳。敦忠は妻の死後もその家に通っていたというから、男の助信はその邸に居たのであろう。助信に会いがてら時々立ち寄っていたのである(中院本・貞心本・二荒山本・片仮名本等には、「時々かの家に」云々とある)。

「今よりは風にまかせん」は意表をついた表現である。風は桜の花を散らすものであり、その風に散らせたくないと思ひのが桜を惜しむ歌の常である(↓64)。助信の家の者も今まではそう思っていたのだが、しかし「今よりは」却って風の吹き散らすにまかせようと言う。なぜ、今からなのか、その理由が下句に述べられる。

散る木のもとに君とまりけり。散りつつある木の下に敦忠が立ちどまったのを、蕾でもなく花の盛りでもなく、意外にも、花が散りつつあるが故に立ちどまったのだと取りなして(「けり」は氣付きの用法)、これからは、今日と同じように桜が散れば木の下を訪れてくれるだろうから、桜花を散らすべく、吹く風にまかせてしまおうというのである。言いたいことは、「木の下」に「子のもと」を掛けて、もっとしばしば子供の許を訪れてほしいということである。娘をなくし、孫の父親の訪れが自然間遠になってゆく寂しさを訴えたのである。「木」と「子」の掛詞の例、『拾遺集』一一四・一二八四・一三一一など。

返し

あつたゞの朝臣

106 父にも何かまかせんさくら花匂あかぬにちるはうかりき

返し

どうして桜を風にまかせてよいものでしょうか。花の美しさにまだ満足しないうちに散るのはつらいことでした。

返歌も表面は桜花のこととして詠んでいるが、萬意は『新抄』に「風にまかせんといふを助信朝臣の母の事にとりなして、とがめて、いかで風にはまかせん、あかで散りしは憂かりしものと言ひて、かの母のみまかりしは憂かりつるをといふ意なり」と言うがごとく、桜花の散るを

助信の母の死ぬことにとりなしたのである。第五句の「うかりき」に妻を失った悲しみの体験が直截に詠出されている。

家の人の贈歌は、もっといつも訪れてほしいということを訴えたものであったのだが、敦忠の返歌はそれには答えず、上句の「今よりは風にまかせん」の部分をとらえて、結婚後まもなく妻を失った悲しみを述懐した。それで亡き妻の家の者に対する応答には十分になっているが、今後この家を頻繁に訪れるかどうかには言及しなかったという点では、恐らく今まで以上に訪れるということは実際はないであろうから、相手の訴えを上手にはぐらかしたとも言えよう。

さくら河といふ所ありときゝて

つらゆき

107 常よりも春べになればさくら河花の浪こそまなくすらめ

桜河という所があると聞いて

いつもよりも、春になると、桜河は水の浪ならぬ花の浪がたえまなく寄せているだろうなあ。

『古今六帖』三・川に第二句「春来にければ」、第四句「浪の花」としてある。家集にはなし。

桜河は常陸の歌枕(初学抄・八雲御抄等)。『新抄』に「筑波山より流れ出で、みな川の末にて桜の多き所なりと玄旨法印の百人一首抄等にはあれども、国人は水上を桜川といひ、末をみな川と云といへるよし、或書には見えたり」とある。歌枕としては、現実の姿には関りなく桜の咲く河として詠むことは、小倉山を暗しと詠むのと同じである。

第四句の「花の浪」と「浪の花」の異文関係について。二荒山本・片仮名本は「浪の花」であり、『新抄』『井蛙抄』の引用本文も同じ。また

『初学抄』は桜河に「ナミノハナトソフベシ」と注している。

「花の浪」は桜花の浮いた浪。桜河だから桜が沢山あるととりなし、花びらが河面に散り敷いて、浪も花びらの浪なのである。或は、桜河を一本の桜の木に見立てて、春に花が咲くのを花の浪が寄せると表現したのでもあろうか。今は前者に解しておく。花の浪の例、「末の松山も霞のたえまより花の浪こそ春は来にけり」（続拾遺集春下一〇一慈鎮）は花を白浪に比喩した例。藤原泰宗の「池上落花」の題で「花の浪たつ春風ぞ吹く」（続千載集春下一六二）は花びらが浪に浮く様であろう。

「波の花」の用例は「波の花沖からさきて散りくめり水の春とは風やなすらむ」（古今集物名四五九伊勢）を始め、本集雑三・一一四八「散るとみて袖に受くれどたまらぬは荒れたる波の花にぞありける」など、多い。浪の花という比喩は漢詩から借用したものであるらしく、梁の元帝の鴛鴦賦に「朝浮兮浪花、夜集兮江沙」とあり（芸文類聚）、本朝、『菅家文草』に「定啼南海浪花春」（一八四）など四例、『田氏家集』『新撰朗詠集』（慶賀、源順）『類聚句題抄』などにも見える。漢詩から和歌に広まって浪花の語は耳馴れた比喩だった。

だから、一見「浪の花」の方がよいように思われるが、実は、浪花は浪を花に喩えるのであって（漢詩では単に「浪」というに等しい例も見られる）、花それ自体は存在しない。「山花遙向浪花開」（菅家文草四六七）も山の花に対して海の浪を花に喩えたのである。「谷風にとくる水のひまごとに打ち出づる波や春の初花」（古今集春上一二源当純）も同じ。従って、この歌の場合、「浪の花こそまなく寄すらめ」の本文だと、浪が立ってそれが春になると花に見えるという意であり、桜花はなくてもよいので、その場所が「桜河」である必然性がなくなってしまう。桜河だから浪が花に見えるのだとも言えるが、それでは迂遠にすぎる。

桜河を詠む面白さは、河の名の桜によって、現実の桜河がどうである

かには関りなく、言葉の上で、河の兩岸に桜が並び咲いているイメージを想定し、その花びらが散り浮く様を「花の浪」と言うのである。花でできた浪である。だから、その場に花が咲いていると想定する限りは、「花の浪」という本文でなければならぬ。同じ貫之の「桜花散りぬる風のなごりには水なき空に波ぞ立ちける」（古今集春下八九）は、風が花を吹き散らすさまを、空に波が立つと比喩しており、「花の浪」の発想と通ずる。「花の浪」と「浪の花」では、比喩の仕方がちょうど逆なのである。「花の浪こそ」は、水の浪ではなくて、花の浪がの意。水の浪にその上花の浪が加わってというのではない。常は水の浪が寄せるが、春辺になると花の浪がまなく寄せるだろうというのである。

「常よりも」は「春辺になれば」に掛かるとも「まなくよすらめ」に掛かるとも解しうるが、一一八番の類似表現を参考にして第五句に掛かると考える。

前栽に山吹ある所にて

かねすけの朝臣

108 わがきたるひと衣は山吹のやへの色にもおとらざりけり

前栽に山吹のある所で

私の着ている単衣の色は八重山吹の色にも負けないものでした。

『兼輔集』I一九「庭にたゞずみて八重山吹のもとにて」

「ひとへ衣」は『倭名抄』に「釈名云、衣無裏曰単単衣、比止閉岐沼、謂衣則袴可知之」

とあり、『名義抄』も「単衣ヒトヘキヌ」とある。「ひとへごろも」はその歌語的言い方であろう。後代のものではあるが、単衣については『鰯抄』に「自四月一日八春夏モ一重ハ着レドモ此日以後ハ必定用之也」至

五月十余日、用単衣、壮年之人ハ若雞冠木薄色、宿老ハ白衣ニ帷ヲカサヌ、自五月十日至八月十四日、平絹生単衣」とある。

歌は、「一重」と「八重」とを対にして、一重だけれど八重に劣らないと戯れた。詠歌の状況によっては寓意を考える必要もある。『新抄』は「一首の意はかくれたる所なけれど、恋の意など下にふくめられたるやうにも聞ゆ、もしは相知りたる女の調じ送りたる衣などを着て、其女の家に行給へるをりなど詠まれたるにはあらじか、我は二心なくひとへにてとひ来つれば、山吹のやへなれるにもおとらず、といふ意のやうなり、契沖法師は無位の時の歌なるべしと言はれたれど、いかがあらん」という。この『新抄』の男の一寸な恋心を寓しているとの考えも、場合によっては成り立ちうるであらう。

あるいは、単衣を作った女を間接的に称讃したとも解し得るかもしれない。また、単衣を女性その人に喩えているのかもしれない。『狭衣物語』の「色々に重ねては着じ人知れず思ひそめてし夜半は狭衣」の例もある。連想を拡げれば、山吹色は禁色であるから、八重山吹は高貴な女性を喩え、単衣はさほど身分も高くはない女性か、等々。

「ひとへ」「やへ」の技巧の歌。「我宿の八重山吹は一重だに散り残らなむ春のかたみに」(拾遺集春七二不知)「八重咲けるかひこそなけれ山吹の散らば一重もあらじと思へば」(天徳四年麓景殿女御歌合)

題しらず

在原元方

109 ひとゝせにふたゝびさかぬ花なればむべちることを人はいひけり

一年のうちに二度は咲かない花なので、なるほど散ることを人々は惜しんであれこれ言うのだなあ。

前歌と同じく「ひととせ」「ふたたび」という数字の対比の面白さを眼目とした技巧。「一年に再び咲かぬ花」は九七番に既出の発想。

「人は言ひけり」は具体的に何と言うかが明白なので省略した言い方で、五〇番の「山守は言はば言はなむ」の例と同じ。ここは、散るのを惜しむということ。「むべけり」は、なるほどこうだったのだと今改めて気が付いた持気。類例、二一七・三六六など。

寛平御時、桜の花の宴ありけるに、雨のふり待りければ

藤原敏行朝臣

110 春さめの花の枝より流こば猶こそぬれめかもやうつると

寛平の帝の御代、桜花の宴があった時、雨が降りましたので春雨が桜の花の枝から流れ落ちてきたならば、やはり濡れてしまおう、花の香が衣に移るかと思つて。

『敏行集』は下句「ぬれこそぬれめ何かゝくれむ」とする(この本文は後撰集では慶長本に同じ)。「古今六帖」一・雨、敏行「もりてこば一香にほふべく」。

桜の香を詠む歌は『古今集』春上五七友則・本集五六・六九など。漢詩では『菅原文草』巻五・三四四 など。

「猶一む」との構文、本集六一「こころみに猶下り立たむ涙川うれしき瀬にも流れあふやと」『拾遺集』六七〇実方「我ためにはたなるの清水ぬるけれど猶かきやらむさてはすむやと」など、類型化している。

詠歌事情は五六番とよく似ている。歌詞も影響を受けている。

いづみのくに、まかりけるに、うみのつらにて

よみ人しらず

111 はる深き色にもある哉住の江のそこも緑に見ゆるはま松

和泉の国にまいりましたときに、海の辺りで、

春が深くなって、浜松はいよいよ濃い色であることだ、その映る影で、住の江の澄んだ水の底までもが緑色に見える、その浜松は。

『古今六帖』第六・松、敏行。歌詞同じ。作者を敏行とする点は、堀河本には作者表記がなく、従って前歌の作者敏行がこの歌の作者でもある形だが、そのような伝本の存在と関係があるであろう。なお、中院本・片仮名本等は作者を躬恒とする。『躬恒集』にはこの歌はない。

「うみのつら」は海に面した所。『伊勢物語』七段に「伊勢・尾張のあはひの海づらを行くに」とある。海岸ぞいである。

「春深き色にもある哉」は、春が深くなったの意に松の色が深くなったの意を掛ける。『躬恒集』(Ⅲ48)「春深き色こそなけれ山吹の花に心をまかせつるかな」など。「深し」はまた「水」の縁語でもある。「水底に沈める花のかげ見れば春は深くもなりけるかな」(延喜十三年亭子院歌合・三四・是則)など。色の濃いことを深しという例、本集の一二四・九三二など。「春の色はまだ浅けれどかねてより緑深くもそめてけるかな」(貫之集)は「深し」「浅し」は「色」の縁語。

住の江と松は歌枕としての取り合せ。「住」には「澄」を掛ける。

女ども花見むとてのべにいで、典侍よるか朝臣

112 春くれば花見にと思心こそそのべの霞と、もにたちけれ

女たちが花を見ようとして野辺に出て

春が来ると、花を見に行こうと思う心が、野辺の霞が立つのと一緒に立ち起るものだったのですねえ。

堀河本、詞書なし(作者は底本に同じ)。二荒山本、作者名なし。第五句、堀河本・片仮名本「たちまじりけれ」と。『新撰万集』下・春「春來札者花緒見牟云心許曾」『古今六帖』第二・野辺、第三句「花見むと思ふ」第五句「ともにたちいづれ」とある。

詞書、「女ども」は宮中の女房(女官)たちであろう。典侍藤原因香は『古今集』に四首採られていて、当時としては著名な歌人。

春が来ると霞が「立つ」ということは、既知の常識である。しかし、春が来ると「花見にと思ふ」心が「立つ」ということは今まで気付かなかった。ところが、それに今気付いたという気持が「心こそ……たちけれ」にこめられている。

霞とともに立つという表現は「都をば霞とともに立ちしかど」(後拾遺集・旅・五一八・能因)など。

あひしれりける人のひさしうとはざりければ、花ざかりにつかはしける
よみ人しらず

113 我をこそとふにうからめ春霞花につけてもたちよらぬかな

親しくしていた人が久しく訪れなかったので、花盛りの頃に詠み送ったうた

私を訪ねるといふのならいやでしょうが、春霞が立ち、今を盛りと咲いている花を見ることがにかこつけてさえも立ち寄らないのですね。

『古今六帖』第一・霞。歌同じ。

花を見るときを口実にして恋人の訪れを期待するのは、恋人の訪れを求めるパターンの一。『新抄』は『万葉集』第十・一九九〇「我こそはにくくもあらめわが宿の花橘を見には来じとや」『新古今集』春上・五一・西行「とめこかし梅さかりなるわが宿をうときも人は折りにこそよれ」を、『標注』は『拾遺集』雜春・一二六一・伊勢「われこそはにくくもあらめわが宿の花見にとだに君が来まさぬ」(赤人集・人麿集にも)をあげている。『万葉集』『拾遺集』の歌はこの歌と影響関係があろう。『伊勢集』には右の歌は入集していないが、「我をこそ忘れもはてめ梅花咲きしぞとだに思ひいでなむ」(二二四)という同想歌がある。『道命阿闍梨集』二四六「我をこそとはまうくとも都人山ほととぎすききに入らなむ」は上句に本歌の影響がある。花盛りに人を訪うべきこと、七〇番に既述。

第三句の春霞は当季の景であるが、第五句に「たちよる」と用いるために、その縁語として「霞」を詠み込んだ。

『後拾遺集』春上四〇選子内親王「春はまづ霞に紛ふ山里を立ち寄りてとふ人のなきかな」

返し

源清蔭朝臣

114 たちよらぬ春の霞をたのまれよ花のあたりと見ればなるらん

立ち寄らない春霞をあてになさって下さい。霞が立ち寄らないのはあなたの家を花の咲くところと思っているからなのでしょう。

女の贈歌では単なる添景であった春霞を、返歌では正面に据えることで、女へのまともな返事を避けた。人から恨まれて、とばけなければなら

らない時の答え方の一つの型である。

春霞は花を隠すものとして詠まれる。『古今集』春上・五一・不知「山桜わが見にくれば春霞峰にも尾にも立ち隠しつ」をはじめ、同五八・七九・九四など。その春霞が立ち寄らないのは、あなたの宿を「花のあたり」と見ているからだ、美しい花を隠したくなくて立ち寄らないのだから、そういう思いやりのある霞をあてになされよと、自分の訪れないことを巧みに弁解し、かえって恩にきせるとばけぶりである。第五句で「らむ」と推量の助動詞を用いているのは、『新抄』が「らんとあるは一首を霞の上にして、表の意は霞にしたてたるがゆゑなり」というとおり、あくまでも表面上は霞を客観的に詠じた形である。

裏では、霞を自分に、花を女に喩えているのであるが、「人の見ることや苦しき女郎花秋霧にのみ立ち隠るらむ」(古今集秋上・二三五・忠岑)「誰がための錦なればか秋霧の佐保の山辺を立ち隠すらむ」(同秋下・二六五・友則)のように、霞や霧で隠すのは独り占めするためであり、逆に霞が花を人目から隠さないということは、清蔭の返歌も、恋の寓意としては、あなたのよう美しい人を独り占めするのはもったいないから、他の人がよくあなたを見ることができるようするために立ち寄らないのだ、ということであろう。即ち、他の男を通わせてもよいです、そのじゃまはしません、それはあてにして大丈夫ですよとの意である。女の歌から判断すると、男は久しく訪れていないから、おそらくは心変わりしてもはや女のもとへ来るつもりはないであろう。そうであれば、単なる弁解ではなくて、もっと積極的に、もう立ち寄るつもりは無いことを伝えた歌と解してよいであろう。そのような意志を「頼まれよ」などと、いかにも愛情ありげに表現するところが平安朝貴族の表現法である。「たのまれよ」の「れ」は尊敬の助動詞。『拾遺集』恋五・五二七・

不知「拾てはてん命をいまは頼まれよ逢ふべきことのこの世ならねば」

せん。

山ざくらをゝりてをくり侍とて

伊勢

115 君見よと尋ねておれる山ざくらふりにし色と思はざら南

山の桜を折って人に贈るということ

あなたに見て下さいと思って、探し求めて折った山の桜です。盛りをすぎた花の色だとは思わないで下さい。

『伊勢集』一四五三。歌同じ。

工 藤 重 矩
山の桜は都よりも少し遅れて咲く。『源氏物語』若紫巻の巻頭に「三月のつごもりなれば、京の花ざかりはみな過ぎにけり。山の桜はまださかりにて」という。下句の意は、「古りにし色」の桜ではあるが、せっかく探し求めたのだから、つまらない桜とは思わないでほしいの意か、盛りの遅い山の桜の、その盛りの桜を探し求めたのだから、洛中の桜と同じにみて「古りにし色」だとは思わないでほしいの意か。前者と解するのが穏当であろう。

宮づかへしける女の、いその神といふ所にすみて、京の

ともだちのもとへつかはしける よみ人しらす

116 神さびてふりにし里にすむ人は都に、ほふ花をだにみず

宮仕をしていた女が、石上という所に住んで、そこから京のともだちのもとに遣したうた

神々しいさまに古びてしまった里に住んでいる人間は、都では今花が咲きにおっているでしょうが、その花をさえも見ることはありません

詞書、片仮名本では「ミヤツカヘシ侍ケル女ノ、タヨリニツキテキナカニスミハベリケルニ、ソノカミノトモダチノモトニツカハシケル」とあり、「石上」という地名はない。二荒山本にはこの歌なし。

『新勅撰集』春下・七四に「題しらす 山辺赤人」として入集。『赤人集』西本願寺本、また大江千里の『句題和歌』に「不見洛陽花」の句に対してこの歌がある。おそらく原作者は千里であって、『後撰集』は千里の歌をそのまま借用したのであろう。『新勅撰集』が赤人とするのは『赤人集』からの撰入であらうが、撰者定家のミスと考えられる。

「京のともだち」は宮仕へ当時の同僚であらう。「ともだち」はいわゆる友人の場合もあるが、「同僚」「仲間」である場合も多い。この場合も、現代語でいう「友」ではないであらう。片仮名本・雲州本・堀河本等は「京の」ではなく「そのかみの」（堀河本は「そのうゑの」であるが、これは「その上の」からの誤転であらう）とあって、「当時の宮仕え仲間」の意が明確である。なお、底本の「いその神といふ」と片仮名本等の「そのかみの」は何か関係がありそうでもあるが、不明確。

「花をだに見ず」の「だに」は、昔の宮仕え所を見ない（即ち、昔の仲間に出会わない）のはもとよりの含意がある。都の花やかさを遠く離れた今の生活の寂しさを訴えたのであろう。なお、『句題和歌』の「不見洛陽花」を考慮しなければ、「みやこににはふ花」を、都の花と解さないで、都では咲いている花も、この石上の里では、（花も咲かなくて）目にしないの意とも解しうるかもしれない。

本集・哀傷の「女郎花枯れにし野辺に住む人はまづ咲く花を待たでとも見ず」は同構文。『蜻蛉日記』「万代を野辺のあたりに住む人はめぐめぐるや秋を待つらむ」は類似構文。

前歌とは「ふりにし色」「ふりにし里」の類似語に拠っての配列。

法師にならむの心ありける人、やまとにまかりてほどひ
さしく侍てのち、あひしりて侍ける人のもとより、月ご
ろはいかにぞ、花はさきにたりや、といひて侍ければ

117 三吉野のよしの、山の桜花白雲とのみ見えまがひつ、

法師になろうという気持のあった人が大和の国にまいりまして、
長いことたちましてのち、親しくしていました人のもとから
「この幾月かどうしていますか、花は咲きましたか」と言っ
てきましたので

吉野の山の桜の花は、山一面に咲いて、いつみても白雲かとばかり
見まちがえています。

『古今六帖』第六・山桜。作者友則。第二句「山辺にさける」第五句
「あやまたれつつ」。『友則集』第四句「雪かとのみぞ」。『友則集』は
勅撰集等から抜き出して編んだ家集だから、『友則集』を以て作者を友
則とすることはできない。作者不明とすべきであろう。

山の桜を雲に見立てること、『古今集』序に「春のあした、吉野の山
は桜は人麿が心には雲かとのみなむ覚えける」とあって(但し、これに
該当する歌は古今集にない)、類型化した見立である。「桜花咲きにけ
しな足引の山のかひより見ゆる白雲」(古今集・春上・五九・貫之)な
ど。『詞花集』春・二一・大江匡房「白雲と見ゆるにしるし三吉野の吉
野の山の花ざかりかも」は本歌取り。『温故抄』は『新勅撰集』春上・
七〇・俊恵法師「三吉野の花のさかりと知りながらなほ白雲とあやまた
れつつ」を指摘している。

亭子院歌合のうた

118 山ざくらさきぬる時は常よりも峯の白雲たちまさりけり

山の桜が咲いた時は、いつもよりも峯の白雲は多くたつのだなあ。

『古来風体抄』にあり。亭子院歌合は延喜十三年三月十三日に行われ
たそれで、歌合本文では作者は貫之である(貫之集にはなし)。(萩谷朴
『平安朝歌合大成』一四八頁以下)。この歌は右方で、左方は躬恒の
「咲かざらむものならなくに桜花おもかげにのみまだ見ゆらむ」であ
った。宇多法皇の勅判を伝える判詞は「左は『らむ』といふこと二つあ
り、右は山桜といふことまぐ、とて持になりぬ」とある。右は山桜を詠
んだこと自体が良くないというのであろうか。

山桜を白雲に見立てること、前歌に述べた。但し、この歌は、その見
立を背後に含んで、表面は「桜が咲いた時は、白雲がいつもより増え
る」という因果関係を発見したことにともなう感嘆として詠まれている。
『金葉集』春・四八・顕季「桜花咲きぬる時は吉野山たちのぼらぬ
峰の白雲」は本歌に拠る。↓一〇七番。

山ざくらを見て つらゆき

119 白雲と見えつる物をさくら花けふはちるとや色ことになる

山の桜を見て

白雲と見たもののなのに、山の桜は今日は散るといふのだろうか、
色がいままでとは違うようになってゆく。

『古今六帖』第六・桜。作者不記。第四句「いまはちるとや」。『貫之
集』伝行成筆自撰本切23。第四句「いまはちるとや」。『後撰集』では中

院本・貞応本・堀河本・雲州本等は「いまはちるとや」とする。

『古今集』春下・六九・不知「春霞たなびく山の桜花うつろはむとや色変りゆく」と同想。『続拾遺集』春下・九五・家隆「初瀬山うつろはむとや梅花色かはりゆく峯の白雲」

題しらず

よみ人も

120 わがやどの影をもたのむ藤の花たちよりくとも浪におらるな

わが家の庇とも頼りにしている藤の花よ、たとえ浪が立ち寄せて来ても、花の枝を折られるなよ。

矩 重 藤 工

『伊勢集』(I 65)に、五条の尚侍の四十賀を民部卿藤原清貫が催したときの屏風歌の一つとして、「うみづらなる家に藤の花さきたり」の題で存する。『古今六帖』第六・藤。作者「おなじ人」(前歌は遍照)とある。『続千載集』春下・一九九に「海づらなる家に藤の花のさけりける伊勢」として採られている。

「かげ」は庇護。藤のかげは『伊勢物語』一〇一段「咲く花の下にかくる人おほみありしにまさる藤のかげかも」の面影がある。また「かげ」は「ふち(藤・淵)」の縁語。

「たちよりく」は浪のこととして詠んでいるが、『古今集』秋下・二九二・遍照「わび人のわきてたちよる木のもと頼むかげなくもみぢ散りけり」のごとく、「かげ」とも縁がある。『新抄』が引く『貫之集』(古今六帖・第六・松)の「我のみやかげとはたのむ白波もたえず立ちよる岸の姫松」も、人が立ち寄る意と、浪が立ち寄せる意とを兼ねている。(掛詞ではない。浪を擬人化しているので、「立ち寄る」の語自体は一義である。この二二〇番も浪を擬人化している。)

花を折るとは、恋の歌では、女性を手折ることを意味するが、ここでも恋歌めかした言い方なのであろう。単純に自然の波に折られるなどの意でも、もとより可である。どちらにとるかでずいぶん印象は違ってくるが、『後撰集』の歌としてはどちらとも決めにくい。

花を浪が折るといふ例歌。『拾遺集』夏・八七・躬恒「手もふれで惜しむかひなく藤の花底にうつれば浪ぞ折りける」『新勅撰集』冬・三七八・延喜御製「水底にかげをうつせる菊の花浪のをるにぞ色まさりける」『金葉集』春・九〇・顯季「住吉の松にかかれる藤の花風のたよりに浪やをるらむ」など。また「折らるな」には『菅家文草』巻五「紫藤」の「栄花得地長応賞 不放遊人任折来」の影響もあろうか。

さて、この歌を『伊勢集』に伝えられる原場面、五条の尚侍の四十賀の屏風歌という場に置いて見るときには、『後撰集』春の部に題しらずで収められているのとは、おのずから異った解釈も必要であらう。

五条の尚侍は、角田文衛『日本の後宮』の「歴代主要官女表」が当てるごとく、藤原満子であらう。『玉葉集』雑二・二〇六八には『伊勢集』にある件の屏風歌の一首が採られているが、その詞書は「尚侍藤原満子四十賀、大納言清貫し侍りける屏風の歌に」となっている。尚侍満子は醍醐天皇には伯母にあたる。それ故、四十賀には天皇主催の宴もあった。清貫の依頼した屏風歌が天皇主催の宴の折のものかどうかは不明だが、そのような尚侍藤原満子の賀の屏風ということになれば、第三句「藤の花」は藤原氏(満子一族)を象徴していると見るべきであらう。第一、二句「我宿のかげとまたのむ」も、屏風歌としては、海辺の家の主の立場で詠んでいるのであろうが、藤原氏の栄えに対する賀意がある前に引いた『貫之集』の「我のみやかげとは頼む」も、実は同じ満子四十賀の屏風歌で、賀意の発想も同じ。その点も『伊勢物語』一〇一段に

関連する。

ところで、『聞書註』『正義』は第五句「なみにをらるな」の「浪」を「次」「等閑」との掛詞と解している。即ち、並々の平凡な男に手折られるなを掛けていっているという。「浪」と「並」とを掛けることは『万葉集』八五八「若鮎つる松浦の河の河波のなみにし思はば我こひめやも」また『古今集』恋四・六九九「み吉野の大川の辺の藤浪のなみに思はば我がこひめやは」の例があり、無理な掛け方ではない。

なおまた、「をらるな」の「をる」に「居る」を響かせているかもしれない。「折る」「居る」の掛詞はしばしばあり(↓七七・一〇四)、「庇」ともたのむ」の縁からは「居る」の意も成立しうるであろう。

121 花ざかりまだもすぎぬに吉野河影にうつろふ岸の山吹

花盛りはまだ終らず、うつろふ(散る)時ではないのに、吉野川に影となつてうつ(映)ろっている岸の山吹だ。

「うつろふ」には、散るの意と映るの意とがある。そこをとらえて、まだうつろ(散)時期でないのにうつろつて(映)いると洒落たところが面白味。『標注』に指摘するごとく、この歌は『古今集』春下・一二四・貫之「吉野川岸の山吹ふく風に底のかげさへうつろひにけり」に拠る。

人の心たのみがたくなりければ、山吹のちりさしたるを
これ見よとてつかはしける

122 しのかねなきてかはづの惜をもしらずうつろふ山吹の花
相手の心があてにしがたくなったので、山吹の花の散り残った

のを、これを見よと思つて送ったときのうた

耐えきれずに、蛙が声をあげてないで惜しむのもかまわずに散つてゆく山吹の花だ。

「しのかね」は『古今集』恋三・六六八・友則「我が恋を忍びかねては足引の山橘の色にいでぬべし」『後撰集』恋二・六〇六忠房「かくれぬにしのびわびぬる我身かな井手のかはづとなりやしなまし」などのごとくに、恋心を隠しきれない意を含意している。

蛙と山吹の組合せは一〇四番に述べた。山吹とかはづの鳴声とを詠み込んだ歌は『古今集』春下・一二五をはじめ多くあるが、その鳴声を山吹が散るのを惜しむのだと考えるのは「足引の山吹の花散りにけり井手のかはづは今やなくらむ」(延喜十三年亭子院歌合・興風)などもある。春の花の散るのを鶯が鳴いて惜む(古今集一〇七・一一〇)のと発想は同じである。

歌意は、『抄』に「山吹のうつろふを蛙の惜しみて鳴く事をよみて、我が人の心の頼みがたくなりうつろふを惜しむ心を忍びあまりて、鳴て悲しむをも猶しらずがはなるを恨む心をあらはせる歌なるべし」とあるところ、表は山吹のことを詠んでいるが、蛙に自分を、山吹に男を寓して、山吹の「うつろふ(散る)」のに、人の心の「うつろふ(変る)」ことを添えている。前歌では「散」と「映」との二義をかねていたのと同じ修辭法である。

人の心変りを花が散ることに喩えることは「色見えうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける」(古今集・恋五・七九七・小町)など多い(↓二一番)。『千載集』春下・一一七・清輔「山吹の花のつまとはきかねどもうつろふなへになくかはづかな」は「うつろふ」に心変りと花の散る意とを兼ねている。

作者が歌を遣る意図は、相手の男に来てほしいということ。表の意でも、山吹が散る前に早く見に来て下さいとの意である。裏で訴えていることと、表で言っていることは、この点で一致している。『大和物語』一〇〇段、季縄の「散りぬればくやしきものを大井川岸の山吹今盛りなり」の歌を見て、醍醐帝が急いで行幸したという話などを思い合せるべきであろう。

片仮名本の詞書は「人ノ心ノタノミガタクノミナリケレバ、チリノコリタルヤマブキヲオリテ、コレミヨナド、タハブレニイヒツカハシタリケレバ」と、歌は山吹を送って来たことに對する返歌となっており、しかも「戯れ」であるという。(堀河本も同趣)この詞書に従えば、心変りした相手(男であろうか)に、心がうつろったことを寓して、散り残った山吹を送った、それに対して、この歌はその山吹を逆手にとつて、責任を相手に転嫁してしまうという詠法の歌となろう。

片仮名本・堀河本と他の本とでは、詠歌事情はもとより歌の持つ意味など、すっかり変わってしまう。贈答歌がもつ不安定性である。